

謝罪におけるお辞儀の有無による赦しと寛容動機についての検討

樽林 健

我々は日常生活において他人や社会に対し、何らかの不都合や損失を与えてしまったときに謝る。心理学において謝罪とは、自身の非を認め、相手に赦しを請う行動である(Gonzales, Pederson, Manning, & Wetter, 1990)。そして、それは言語的謝罪と非言語的謝罪に分けられる。言語的謝罪については、場面によって必要と評価される言語的謝罪の違いの検討などがなされてきた。(土井・高木, 1993)。一方、非言語的謝罪についても、例えば、どういった角度・長さのお辞儀が謝罪場面に適切かといった研究が行われている(柴田・高橋・行場, 2015)。

さらに、被害者の立場から、赦しについての検討が行われてきた。赦し、すなわち寛容性には、寛容行動と内的寛容性の2種類がある(高田・大淵, 2009)。この寛容性を促進する要因として、加害者との関係の重要性を表す関係価値と、加害者が将来どのように振る舞うかがわからない度合を表す意図の不確実性が指摘されている(大坪, 2015)。一方で、受容、一般化、関係維持、調和維持、関与回避、共感・理解の6次元の寛容動機により赦しが促進することも論じられている(高田・大淵, 2015)。受容動機とは、集団内で受容されることを目的とした寛容動機である。関係維持動機は、加害者との人間関係を壊したくないと思うことである。一般化動機とは、被害が人付き合いにはよくある一般的なものであると見なすことである。調和維持動機は、集団内の調和的關係を損ねたくないとする気持ちである。関与回避動機とは、葛藤に関わることで生じる不快感を回避したいという願望である。共感・理解動機は、対立相手の考えや事情を理解し、相手に共感を抱くことで赦しへと繋がる動機である。

企業の不祥事や、有名人の不倫問題が多く取り沙汰される昨今、赦しのメカニズムを明らかにすることが求められている。ところが、これまでの謝罪と赦しの研究は、現象としての謝罪を、被害者が主観的に判断した結果について表面的に検討したものであった。そこで、本研究では非言語的謝罪の典型であるお辞儀に焦点を当て、先行研究の赦しの促進要素を複合的に用いることで、赦しの生起のメカニズムを明らかにすることを目的とした。

調査では、場面想定法を取り入れた質問紙を用いて、お辞儀の有無を条件とした比較を行った。本研究では、お辞儀が寛容動機の生起を促進し、その寛容動機により赦しが促進されるという構図を想定した。質問紙では、表面上赦しを示す寛容行動と、心からの赦しである内的寛容性、そして、それらの赦しが行われた寛容動機に関する質問を行い、参加者に評定させた。

その結果、お辞儀は寛容行動、内的寛容性を共に促進した。そして、お辞儀は相手を思いやる共感・理解動機や、同じ過ちを二度と繰り返さないと感じる意図の不確実性動機などを生起し、2つの寛容性は、共感・理解動機や意図の不確実性動機、一般化動機により促進された。共感・理解動機と一般化動機は、相手の福利を守ろうとする利他的動機に分類されており(高田・大淵, 2009)、意図の不確実性動機も、相関分析の結果から、利他的動機と密接な関係にあることが示されている。このことから、お辞儀が加害者を思いやる動機を生起させ、これらの動機が表面上の赦しだけでなく、心からの赦しを促進することが明らかにされた。(社会心理学)